

白金葎

9月号



令和元年9月発行

定例会句会（毎月第三金曜日）

光 みち

十月四日（金） 十時～三時…山種美術館、國學院大學食堂
十月十八日（金） アビスタ第五正午～三時…当季雜詠五句
十一月十五日（金） 第一コビアン…正午～三時…
九月例会句会報 （19／9／20 10名欠1）

光成高志

三尺の間口に読経地藏盆

浅野正美

トライアスロンスイム一筋水動く

台風が目が過ぎゆける午前二時

かなぶんが去んであざやか蓼の花

一斉に谷中の墓地の草を刈る

佐藤宏之助

つくつくと旧藩邸に残る蟬

再校の誤字正しゐて秋暑し

黒揚羽残る暑さの中を飛ぶ

秋扇を颯とひらきて姫舞ふ

天守より見送る秋の燕かな

南瓜貫ふ臍の緒の如茎つけて

秋暑しラジウム温泉十九度

爽やかや御胸開きの阿弥陀さま

難陀龍王暴れ大型台風来

鶏頭の襷に隠るゝ小虫たち

送り火の消えて広がる闇夜かな

秋空に富士の高嶺は雲まとふ

咲きまじるコスモスゆれる街道筋

満月と満天の星駱駝隊（平山郁夫シルクロード美術館）

雨戸をもはずし台風去りにけり

（花の名）

田宮敦子

屋上に猫のひげあり秋日和

万葉の萩の花咲く国分寺

式部の実犬の散歩の仲間入り

紹羽織の帽子の紳士銀座かな

秋日和赤子芝生をハイハイ

増田陽一

山路の窯出づればゆれる葛の花

飯田孝三

腰痛依然終夜クワガタ動くなり

法師蟬採血の血の昇りゆく

夏蝶をきれいに展翅して淋し

吾も何処か火傷してゐる焼茄子

鳴き尽す蟬卓上にその一屍

松村幸一

曼珠沙華白曼珠沙華二三本

磯目健二

初雁を見ぬ手賀沼の月日かな

いわし雲富士を小さく押しやりて

本読んでゐたる虫売忘れず

焼き上がるパンのあれこれ小鳥来る

満月をかりがね渡る數が見え

武者正子

故人より年長となる盂蘭盆会

武者昭七

石垣に蛇の目見たり終戦日

蟬弧を描いて飛び去る真昼時

ジャスミンに世間話を聞かせをり

大海の住み心地問う初さんま

秋あかね今日筑波嶺を越えしてふ

遠雷の静もりてゆく野末かな

重なりて重なり開く大花火

大きな柿の木ありき祖母の家

雫から雫へ伝ふ花の雨

一句鑑賞

光成高志

腰痛依然終夜クワガタ動くなり

陽一

陽一さんは二年前に股関節の手術を受けられて今は杖を引いてよく歩かれます。それでも腰痛は依然としてあるという感覚を鋏形虫にかこつけて詠まれたものです。クワガタを二匹飼っているという自解をされましたので、それから想像するに、夜すがらごそごそ動いているクワガタや俺の腰痛はすつきりいかないぞと呼びかけているベッドでの思いだと思います。クワガタの大きなはさみを思つて読者も痛んで下さいと云うユーモアもあります。焼茄子の句も別な身体感覚を詠んだものです。

爽やかや御胸開きの阿弥陀さま

みち

爽やかな上野の森を抜けて博物館のみほとけ展に入っていくとその薄暗い展示室の一面にスポットライトを浴びた阿弥陀如来像が御胸を開かれて座つておられる。同行した私は阿弥陀様を見なかつたのですが、ひよつとしてお釈迦様や薬師如来像などを見て、その本師・本仏の阿弥陀如来像に変えて掲句をものしたのなら、みちさんおそるべしと思います。大宇宙の阿弥陀さまと爽やかかの季語はよく響き合っていますからね。

満月と満天の星駱駝隊

正美

この句も正美さんの自句自解がありました。これは甲斐小泉の平山郁夫シルクロード美術館で見た絵の句であります。満月と満天の星のシルクロードを行く駱駝隊を描いた日本画です。画伯は夜の風景がお好きなようで、私の蔵書の画帳にもイスタンブールのモスクやパルミラの遺跡の絵は掲句のような満月と星の下に描かれています。少し脱線です。生口島瀬戸田の記念館は平山さんの生誕地であつて、私はまだ美術館がない中学生のとき近くの耕三寺を見学しました。五十年位経つて、学会での帰り瀬戸田に行き、美術館を訪ねたことがあります。原爆に遭つて呉線須波まで逃げて来てそこから生家に帰つたこと、その秋から忠海中学に転校し卒業後東京の美術学校に入つて学び芸大になつた後卒業して同級生の方と結婚、作品を発表され続けられた。陽一さんと同じ年、みちさんのお父様の奉職された忠海中学とか出て来るので何とはなく懐かしく思われる画伯でありました。

一句鑑賞

増田陽一

左手でも歯磨く八月十五日

孝三

普段は特に意識することなく右手で磨いているけれど、気がついてみると左で磨いていた。習慣にないことだっ

たのを意識したのである。終戦日だということが頭の隅にあって、普段と違う行動をとらせた。この微妙な齟齬を自ら意識したのであろう。或いは「でも」の措辞にアクセントをおくならば、両手で殊更丁寧に磨いて居たのに気がついて、だから何だとは言つてないが終戦日を意識していることは確かである。その心理はいろいろ想像されるけれど微妙なもので、微かな食い違いを提示したところが俳句形式独自の味であらうか。

石垣に蛇の目見たり終戦日

正子

これも終戦に係わる体験である。「石垣に蛇の目を見た」ならよくあることだけれど、蛇の「目」に拘るなら恐らく瞬間の印象であり、「見たような気がする」に近い、異常な体験ではあるまいか。「終戦記念日」ではなく昭和二十年八月その日の幼年が見た忘れ難い記憶ととりた。

星明り葦原遠く沼眠る

健二

深夜の沼に星明りがしている。カシオペア座、ペガサス座と秋の星座も揃ったであろう。沼にまだ鴨は来ず、葦原に宿っていた秋の燕も南方に去って黒々とした静かな葦原が遠く見える・・・などと想像されるけれど、健二さんは自宅の窓から見ておられて、羨ましいことである。

一句鑑賞

磯目健二

夏蝶をきれいに展翅して淋し

陽一

展翅は成虫の蝶を標本にする最終作業である。展翅までの道程は、野外で成虫を採集するか、採卵から飼育して成虫を得るかで大きく異なる。後者の場合、孵卵・幼虫・蛹・成虫のプロセスを適切に自ら保護管理しなければならぬ。孵化のあと五回の脱皮変態をする幼虫の食餌を配慮し蛹となれば羽化までの日数をじつと待つて空を飛ぶ美しい成虫に直面出来るのだ。長い間苦勞して卵・幼虫・蛹から育てて羽化のあと成虫の展翅となる。美しい標本を得た満足感の一方で、それまでの蝶の一生を支えてきた、いわば育ての親の別離感も深い。

顎上げてあんぐり眠る車中西日

孝三

空調完備・密閉二重窓・高速の今日の列車では無縁だが、一時代以前にローカル線の鈍行三等車などで見慣れた車中風景。開け閉めできる木枠の煤けたガラス窓を透して西日が射し込む座席で、硬い背板にもたれ鼻の穴を上向きに居眠りする男客。斜陽でも暑熱で蒸れる昔の汽車の旅である。超高速の新幹線なら居眠りする暇もない。吾も何処か火傷してゐる焼茄子

陽一

焼茄子がこの句では心の傷のメタファとなっている。生身を焼かれ串に刺され泥濘の如き味噌だれに塗れる焼

茄子の姿に、吾が人生の苦渋を重ねて心が痛むのである。金子兜太の有名な「彎曲し火傷し爆心地のマラソン」の重層的な暗喩表現が思い浮かぶ。

紹羽織の帽子の紳士銀座かな

敦子

現代流行ファッションの中心でもある銀座を和装の人のいい男性が悠々と行く。国際色豊かな街頭でそのアンバランスぶりは異彩を放つが、内外から人々が蟬集する銀座なればこそその点景といえる。今日では珍しくなつたが、かつては紹羽織に夏帽子は夏の正装だった。今日の銀座街頭をその和装で闊歩するのは、一流の役者・芸能人が古風を好む粋な旦那衆であらうか。

送り火の消えて広がる闇夜かな

正美

盂蘭盆最終日の送り火は、各家の門前や戸口で焚くほか、墓地や空き地で大々的に燃やす地域もある。精霊送りの集団行事が終わって火が全く消えると人も散じ辺り一面が夜の闇と寂寥に包まれる。

受贈誌（九月号）

岩煙草滴りながら花終へし（東京クラブ）

理佳江

落ち蟬やワイン工場の赤煉瓦（〃）

万世遊

夕厨灯すに早き残暑光（〃）

璃子

山鳩（鳴く音くぐもり秋暑し）（〃）

晴夫

（10月兼題）葡萄の日本原産として甲州ぶどうが有名云々と主宰璃子さんの解説あり。他に秋の夜や考と語らふ猪口一つの考はチチと読む、亡父のことある。）

散らばれる秘湯のスリッパ星涼し（あすか八月号）山尾かづひろ

夜光虫に焼玉エジン壇ノ浦（〃）

〃

山尾かづひろ吟行ノート八月（竿灯祭）

夕闇に光の稲穂大竿灯

保田 栄

蒲の原揺るゝさらゝ音のして

光成高志

蒲の穂のまだ硬くしてきりたんぼ

〃

息飲めり大竿灯の撓むとき

長屋璃子

展翅せり妻かも知れぬ揚羽蝶（小熊座九月号）

増田陽一

硝子板上のバレエ昔日のルネ・クレール（〃）

〃

新しき迷路はありや蜷のみち

（〃）

〃

ペディキュアと口紅つけてパリイ祭萱10月号田宮敦子

外国の言葉飛びかふ蓮見船（〃）

〃

芭蕉のかるみ以後（55）

光成高志

貞享二年卯月の末庵に帰りて旅の疲れをはらすほどに、夏衣いまだ風をとりつくさず、と紀行文を閉じた。この年には「名月や池をめぐりて夜もすがら」が作られ、翌年には「古池や蛙飛びこむ水の音」の名句が作られるが、毎日毎日忙しい風雅の日程をこなしている。これは死ぬ

まで続く。江戸の帰着後半月ばかりして千那に返信をしている。「辛崎の」の句形について成案形が書かれているのが注目されるとされるが、私は俳句について論争は好ましくなく芭蕉が返事しているところが、なるほどと思つたのでその書簡を書き写しておく。千那は堅田本福寺の住職で前年に入門している。

貴墨 かたじけなく 辱 拝見、御無事之由珍重奉_レ存候。其元滞_{にぞんじたまつり}

留之内得_{うち}「閑語」候而_て、珍希寛申候。

一、愚句其元に而之句

辛崎の松は花より臆にて と御寛可被下候。_{くださるべし}

山路来て何やらゆかしすみれ草

其外五三句も有之候へ共、_{かさねてかきつけようすべく}重而書付可_レ申候。

一、此秋・此萩之あらそひ、尤此道、是非をあらそふも道のひとつに而御坐候へ共、あながちに口論を好事、愚意好ましからず候間、兼而能程に御あらそひ御尤候。

一、基角へ御状、重而返状可仕_レ候。嵐雪他国へ罷候不及「貴報」候。何やらいまだ取込、旧友久々咄共指つもあり、手透無「御坐」、貴報草々のみ。

一、渋谷与茂作殿堅固に相見え候。御手跡見寛候。

五月十二日

芭蕉桃青書

千那貴僧

これを読むと千那が唐崎の松の句の形について尋ねたのに答えて、成案形として「にて」留を覚えておいて下さいと書き送ったのである。後の雑談集にも去来抄にも、にて留の是非についての論争が書かれてある。それに答えて芭蕉は、予が方寸の上に分別なし、只眼前なるはと言われた、角・来が辨皆理屈なり、われはたゞ花より松の臆にておもしろかりしのみト也、と去来抄にある。山路来て何やらゆかしすみれ草の句も挙げているところをみると芭蕉もこの句によつて新しい境地に入つたのを実感したのである。後に素堂が道の辺と山路来ての句がこの紀行の秀逸なるべけれと断言していることは既に述べた。この書簡では、又千那の「夏萩の此秋いやかほととぎす」の句についての是非の論争は俳諧の道の一つではあるが、必要以上に論争を好むことは私には好ましいとは思わないので適当に済ました方がよろしいと存じますと云っているのだ。嵐雪が他国へとあるのは、嵐雪が主君井上相模守に随行して越後高田に赴いたことを指す。二年後の鹿島詣から帰庵して笈の小文の旅に出立前に素堂と蓑虫説を交している。これも芭蕉と素堂の盟友とし

ての禪問答のような重要な文章なので、後に紹介する。半月ばかり後の六月二日には百韻の連歌を巻いている。小石川關口なる鈴木清風旅宿において、基角・嵐雪・才丸・コ齋・素堂・清風の七吟である。清風は尾花澤の紅花問屋の主であり、屢々上方筋を往来していた。後の奥の細道に清風と云者尋ぬ、とある。私は昔清風記念館を尋ねようとしたら、丁度月曜日の休館日にあたり入れなかった。紅花は齋藤夏風さんがお好みであつたこと、綾女さんの畑に咲いていて種をもらつて鉢に咲かせた思ひ出がある。思ひ出したので付け足した、蛇足。この年も他に色々あつたらしい。京都の落柿舎のことにつき、先に凡兆日記を引用して三井秋風宅の豪華さを示したが、この貞享二年春にその続きが書かれている。それによると、秋風がその邸宅を捨てたことを聞きつけ、去来が纔わづかなる金子でもて買取つたはいいが、余りにも広漠はくもくなる、しかも見苦しい金壁、襖に張り残したる古書古筆を片とり、金銀の上に黒墨を塗り、部屋も少なくして、二階も取り壊し、上下百畳あつたものを、わずか六畳、三畳二間に縮め、伏見瓦葺の屋根を萱葺にして軒は有合ふ竹瓦にし、檜の縁も竹縁に作り替え、切り捨てた柿の木も又数十本植えつき、男部屋、女部屋、大工の細工処、物置なども残らず取り除き、近所の百姓に分け与え、物

寂びたる體に取りしつらひ、菊亭殿（今出川入道右大臣）に申上げ、庵号を願ひければ、其儘落柿舎と御染筆なし給ひける、去来有り難しとその額をかけたなり・・とあつて此頃から嵯峨の別墅落柿舎と命名したとか。去来の落柿舎記もあるがこれはくどいので省略する。柿の木は四十本もあつたが、実がなつても大方落ちたらしく去来も落柿舎の去来と書き始めたとか。柿がそんなに落ちるものかと不審に思われる向きもあるうが、私の幼少期に落柿を拾いに早晩に歩き回つた経験があり、風のあつた日などはかなり落ちていたのを覚えてゐる。柿渋を取る所に持つて行けば小銭が貰えたのであつた。その年の初秋、芭蕉庵の月みんと舟催して乗りたければ、「名月や池をめぐりて夜もすがら」（翁）が作られた。又、杜國が名古屋にて米の思惑売買の廉かどにより死刑に処せられるべきに決せられるも、曾て、「蓬萊や御國のかざり檜山」（杜國）と吟ぜしことあり、これが国主徳川光友の目にとまり、この作者が杜國なるを聞き死一等を減じて城下追放に処す。これで名前を変えて伊良古の畠村に赴いた。これもこの貞享二年のこと。その二年後保美といふ處に杜國がしのびて有るけるをとぶらはんと、云々とわざわざ訪ねて行つた笈の小文が思われる。さらに私は人麻呂の「潮騒に伊良虞の島辺漕ぐ舟に妹乗るらむか荒き

島廻を」が思われ、さらに三島由紀夫の潮騒を思い浮かべる。そう云えば山口百恵さんはどうしたろうか、と次々想念が巡るがこれも脱線。草稿なので許されよ。十周年刊行時には推敲して削除されるでしょう。芭蕉没後の元禄十一年に風國撰の泊船集が刊行されその中に「花みな枯れてあはれをこぼす草の種」(古園)が載せられている。もっと早い撰は尚白の孤松があり、これは貞享四年に刊行されてその中に同じ句が載っている。芭蕉発句全集の嚆矢^{さし}は前者の泊船集である。芭蕉の句の出典は芭蕉の真筆これを真蹟とするものが一番尊重されるが、その形が短冊・色紙・懷紙・画賛・扇面・草稿など色々ある。この野ざらし紀行は芭蕉真蹟の卷子本として残っている。以上も私の挿入文です。貞享三年芭蕉四十三歳、一月、基角撰「丙寅初懷紙」が出来、基角・文鱗・枳風・ヨ齋・芳重・杉風・仙花・李下・舉白・蚊足・千里・芭蕉・楊水・不卜・千春・峽水の十七吟百韻の中に芭蕉句が五句あり、百韻の前半に芭蕉の評註が残されている。これを写して芭蕉の評を味わってみよう。

俳窓評論纂

*朝日の八月初めの科学季評に山極寿一の自然観の評論が載った。「自然は考えるのか?」というシンポジウム

がパリで行われたのに因んで氏の考えを述べている。今日の大規模な自然破壊を起したのは、自然を人間が管理するという人間中心の考えに誤りがあるという疑念から開かれたシンポである。和辻哲郎の風土論、西田幾多郎の命の本質は主体客体を分離せず、直感的に全体を把握すると、今西錦司の環境と生物種は相互に影響を与えあつて生活の場を作っているという考えに同調している。要するに自然は考えるということ、考える主体は人間だけでなくカラスもメダカも粘菌も動かない植物さえも環境の変化に適切に反応し自らが環境になり他の生き物に影響を与える。エコシステムという生態系は循環系として理解できるけれども、各々の生物は生きて変化する主体であることをよく知らなければその変化によつて引き起こされる事態に対応できない。その例として鹿が急増して植物まで食べられ、樹木が浮きだし激雨による土砂流出などの災害を起すという。生物の変化によつて起さる事を予測するためには、命はすべてつながりあい、影響しあっているという考えにたつことが必要だ。元々日本には主客未分の中に自分があると実感するような自然観が情緒の基礎になっていた。「形なきものの形を見、声なきものの聲を聞く」という西田哲学の言葉はゴリラを追つてジャングルを歩いて来た著者の実感であるとか。

何もないと思つているところに、多様な生物が潜んでいるし、目をつぶれば、様々な声が語りかけてくる。余白を大胆に用いた雪舟、上村松園の画にその精神が投影されている。日本の自然観には間という独特の考えかたがある。里山がそうだ、森と里の共に生きられる山だ。どちらも肯定する容中律というのもそうだし、橋はあの世とこの世をつなぐ。縁側は内であり外である。寓話では動物も人間も通じ合う、鳥獣戯画はアニメの先駆だ。「自然は考える」という主題は人間に帰ってくる。デジタル時代を迎え、私たちは個々の人間をシステムの要素と捉え始めていないだろうか。もう一度自然と人間、人間どうしの関係を見直してみたいと思う、と締め括っている。

*お盆の十七日、著者に会いたい 能楽師安田登著『役に立つ古典』の福田宏樹の書評が載った。能は六五〇年の歴史を持つ。鼓は五〇年経つと音が鳴るようになる。鼓は役に立つが五〇年しないと効果を發揮しない。能の稽古を始める時は相手に二つの約束をしよう。一〇年間は質問をしない。一〇年間は止めない。本当の面白さはそのくらいの年月をかけなければわからないからである。古典はゆっくり、じっくり読まれることを要求する。それが古典だ。遅読を説き、そのためには音読して文章を古典のリズムを感じながら読んでいく。これを推

奨する。最後に社会問題にも多く発言している、楽観とは言わずとも悲観に陥らない、ユーモアを大切に、いかに朗らかに生きていくかを考えていると。

(親友の小野勝士君が今以て能の練習を怠らないと言う。以前春日の能楽堂にて彼のシテの舞台を見た。台詞を言つて舞う能はほんとに右の著者が言われる通りだと私も思う。源氏物語や芭蕉の著書である古典を読んでいるとまさしくそう思う。最後のユーモア・朗らかにもそう思う。それでここに紹介した。)

*木庭頭の古典で社会を考える が朝日に載った。古典から教訓を引き出したりせず、問題を新鮮に感知する姿勢で読もう。近代日本の最大の欠点はテクストをきちんと読むクリティック(精査)の訓練を欠くことである。社会は言葉を通じて成り立っているのだから、言葉についてクリティックを欠いた社会は低レベルのままであり、訳も分らず突進を繰返し、やがて壊滅的に破綻する。森鷗外の『山椒大夫』は、実力により引き裂かれた母子が汚い取引によつて売られ苛酷な隷従を強いられる話である。説経節が因果応報を以てするのに対し、鷗外は安寿の透徹した見通しを高く掲げる。何を見通したか?ほとんど社会構造を、と答えて間違いないだろう。その見通しを、何物も動揺させることが出来ない。厨子王もただそれに従うのみである。この安寿の境地を伝える輝く日本

語は、作者によって陶冶された、応報の情念に耐えて貫き通す鋼のような筆によって初めて実現した。絶対絶命の状況を貫き通すようにして脱出した厨子王は出世して山椒大夫に報復する機会を得るが、鷗外のヴァージョンは素晴らしいことに、厨子王に一味を許させ、人々は解放され、一味までもが「自由な経済」によって一層栄えるのである。鷗外は説経節の応報と人買いシステムが同根であることを見抜き、問題の遷延に他ならない因果連鎖に沿って展開される安寿の予知（確率）にのみ脱出の可能性を見た。（以上著者の文章そのままを打ち込んだ。カタカナの英語を使った説明なのでわかりにくい。鷗外のヴァージョンというのは、鷗外が書いた歴史本ということ。クリティックは形容詞のクリティカルがよく使われ物理化学で臨界のと訳される。ここでは名詞のクリティックであり、批評とかやかましく意見を言う人とかに使われる。ここではよくよく考え判断する精査という意味だと著者は括弧で示している。藤本千鶴子の山椒大夫の解説論文（國文學昭和57年）によれば、マアテルリンクの「青い鳥」を藍本にした歴史小説であり、二つの対応を詳細に分析している。安寿の変貌はチルチル、ミチルが得た夢の啓示に倣い、将来の暗い運命を見通すことによって姉弟の依存関係をやめて独力で運命に立ち向かうべきこと、守本尊が身代りになってくれたように自分も人のために我が身を犠牲にすべきことを悟って、逃走の計画をねる事を表して

いる。輝く日本語というのは説経節正本の泥臭いかつ粗野なものを鷗外にかかるとどんな醜いものでもただ手を触れることによってすべて黄金に変えてしまう魔術師がまさにここでその術をつかったのではないかと思いたくなるほど、いかにも高雅で品の高い言葉になる。近代児童文学の中でも白眉一篇として、成人の味読に耐える作品となっているということ（鷗外選集第五巻小堀桂一郎解説文より）。木庭さんは先輩達の成果を現代はやりの言葉で解説しているに過ぎないと思う。）

* 9.22 朝日の文化・文芸欄に高野ムツオの金子兜太の句集『百年』に思うが載った。陽一さんの結社の主宰の方である。兜太が出征の宴で親子で秩父音頭を踊った、素っ裸で踊ったのを師の楸邨の述懐がこの句集を読むと蘇ると熱情的に書いている。私はその下欄にある磯崎新さんの米寿の会の挨拶が奮っているのが面白かった。本日は沈黙で応えたいと言って切り上げ帰り際これが間ですよと云ったこと。

* 青木啓泰氏 病氣静養中のところ八月九日に逝去されました。七十九歳でした。奥様より本日十二日に電話連絡ありました。大腸癌ということです。取り敢えずお知らせまで（小島 良子）（8.13 木村嘉男からのメール）上、萱主宰の木村さんよりメールが入りました。ここに啓泰さんと俳友としての付き合いを振り返り追悼文と致します。

青木啓泰さんとは平成十四年十一月八日霞の会の句会に投句されてからの付き合いだった。霞の会は故齋藤嘉久さんが立ち上げられた句会でありこの時は四回目であった。会報は平成二十二年十二月の一〇二号まで続き翌年嘉久主宰の逝去で途絶えたが、直ぐに私が白金霞を興してこれを引き継ぎ、私の創刊の知らせに伝えられて白金霞に投句を続けられた。それが平成二十九年十月号の八〇号まであった。その後は自然に投句をやめられ冒頭のメールの通り逝去されたのだ。三年前の春に大腸癌の手術をされたが、変わらず投句はあり、一年半続けられその一年後亡くなられたということになる。私は霞の会の会報を作る役を仰せつかったので、編集時に選句や選評まで書くことになり啓泰さんとの手紙のやりとりがあった。俳句工房の話まで長文の手紙をいただいたのが忘れられない。これは追ってここに残しておきたいと思う。その前に霞の会からの青木啓泰句を抽出し、小文字にて当時の選評などをコピーして載せます。

ちんどん屋枯野に入り休みけり
爛酒をちびちび飲むよ路みそで

春の水蛇口にたまり海遠し（陽）素敵とは敵か味方が葦を焼く
（虎童子）のような句が投句される句会であつたので私は往生した
覚えがある。啓泰さんは後述のように滝春一についてイメージ俳句

のいわゆる現代俳句作家であつたが、それでも啓泰さんの生の声が聞こえるような、生活が見えるような句を投句されていた。

かまきりの雌よりひどい女性かな

壁紙の隅がまくれし四月馬鹿

花びらが紛れていたる夜の句帳

私は「板の間に黽吸いつく梅雨入かな」（高志）のような句を投

句していたように春一風の句の真似はできなかったし、しなかった。

ひしくいが今年も来ている破蓮田

結城から筑波を望む余寒かな

朝顔のつるが伸びゆく筑波山

葛飾北斎の富岳百景ばりの筑波山です。朝顔の花ではなく蔓の伸び行く向うに遠く筑波山の双剣の峰が配置されている。啓泰さんのお住まいが江戸崎町ですから、実景でしょうね。朝顔のつるがまた伸びたか、おっと筑波山が見えるぞと、初秋の澄んだ朝の季節を感じて居られる啓泰さんの顔まで見えてきますね。見たまにまに出来た句ではないでしょうか。打見たままの句です。思いをのべることが出来ない俳句の潔さが、読後に余韻を漂わせます。私は、春過ぎて夏来るらし白袴の衣乾したり天の香具山（持統天皇）の御句まで連想しました。

ケチャップをまぶしたような月昇る

大根の廊下にならぶ白さかな

煮大根少しがくてすき間風

初句会手抜き的一句混ぜにけり

御歩射宿筍飯はてんこ盛り

御歩射宿とは何か。これがわからなければこの句は観賞できない。

作者の啓泰さんから付けられた手紙を下に示すのが一番良い。「御歩射は我々の江戸崎町では各町内どこでも春に催される神事で、町（部落）の意志決定機関です。女歩射と男歩射があります。宿に当たった当家は一年間神様を預かっていることになります。我々は「おぶしや」と呼んでおります。今でも形骸化ではなく、立派な行事？として活動しています。婿殿・嫁殿は、この「おぶしや」で仲間入り致します。そうすると、祇園祭山車引きに一戸一名の資格で参加OK。そしてやがて30才過ぎるころ、若衆頭、世話人、やがて区長の役職を努めて一人前。そして神輿の当番町は十年に一度、啓泰雑談 H 18・5月8日。「御歩射の風土性がよくわかります。その宿の寄合の席でのご飯は、筍飯、それは、てんこ盛り。大盛の筍飯を頬張って、そこそこ、賑やかな笑い声が響く座敷や人々の連帯感まで髣髴としてくる筆太な秀句と思います。

盆踊合戦のように混んでくる

十代に病みし肺なり秋渴き

初燕音符のように飛んでくる

和菓子屋の草餅餡入りかぶと型

紅さして海月のような女かな

海月のような女なよしていて、それでゐて人を刺す針を持つ少

し怖い女と思いきや、どうもとらえどころのない紅を差して化粧した毒々しい女など色々想像させられる訳のわからない女かなと男の啓泰さんがもてあましている女のです。ような女かなと切つて女が主題のところ季節感が薄くなるのはやむを得ない。

芭蕉忌や鹿島廻りで月が出る

これは芭蕉の鹿島詣の月見を踏まえた芭蕉を敬愛する常総俳人の句とわかります。私は皆作者である啓泰さんを存じ上げているから、言わなくてもわかりますが、そうでない人でも芭蕉の紀行文に接した人ならわかる句だと思います。鹿島灘から上った月が鹿島神宮の杜を廻つて出て来る。月が出た々と、三池炭鉱からではございませぬ。鹿島廻りで芭蕉の月が出ると喜び、そして、月速し梢は雨をもちながら、という芭蕉の句を念頭に、吾が胸に決意を秘めた句意ではないでしょうか。芭蕉のこの月は、悟りを開いたかのやうな真如の月ですから。深読みは観賞者の勝手。俳句の俳句たる所以を最大限利用して読みました。まだ読み足りないところは、余韻として残しておきましょう。

以上葎の会の会報から句と選評を抜いてみました。啓泰さんの俳句は非常に面白く皆個性溢るゝ句と思われます。ここで到底お終いにはできません。難しい句の自句自解の手紙をいただいたこともあり、それをここに残しておきたいと思ひますし、白金葎に投稿された八一号までの啓泰句を皆読みました。各号一句ずつ選びましたも

のも示したいので、次号次々号と啓泰俳句を見て行き啓泰誂としたいと存じます。

お便り広場（到着順、敬称略）

お父さんお母さんお元気ですか？梅雨に入って不安定なお天気が続いています但体調を崩したりしていませんか？こちらは皆元気です。里樹は山岳部に入って道具も一式揃え、先月は奥秩父の雲取山や山梨県の滝子山へ登山に行きました。大きなリュックに寝袋やら食材やらたくさん荷物を入れていくので「大丈夫かな？」と心配もありましたが、日常ではなかなかできない貴重な体験もたくさんできたようです。野生のシカに出会ったり、満天の星空を眺めたり慣れない様子で仲間達と料理を作ったり・・そんな話を嬉しそうにしてくれました。又男子校の雰囲気にもすっかり慣れて充実した高校生活を送れているようですよ！菜那は春から通い出した塾としてピアノ合唱と忙しく過ごしています。来年はいよいよ中学生ですし、最近「一人部屋が欲しい」と言い出したので今一生懸命部屋を片付けているところです。先日家族でデイズニールランドへ行ったのでその時の写真を同封しますね。お父さんお母さんも体調にお気をつけてお過ごし下さい。

（620 恭子）

長梅雨が明けるのを待っていたような暑さが連日ご体調にお障りなくお過ごしでしょうか。先ずはお見舞い申し上げます。白金霞100号の後すぐに、追加号100号頂きありがとうございます。それからずいぶん日が経ち早くも八月も三日となりました。我孫子一步亭前の皆様のにこやかな顔、中でも小山陽也さんにはこの写真で久々にお会いした気分でしたが、我孫子訪問がこの時最初で最後のご様子と受け止め、何か運命的なものを感じました。（中略）猛暑真夏日続きそうです。お大切にお過ごし下さいませ。光成高志先生 みち様（83 璃子）

暑中御見舞申し上げます。心がほっとするハガキほんとに元気になる様でした。私は体調くずし医者通いの毎日です。軽いうつ病だと診断され薬をのんで少し良くなりました。年取った云う事と受け入れがんばるしかないと思っています。がんばって夕ご飯だけ作っています。出来ない事が増えて来ました。字もペン持つて手がふるえます。まだおしやれもしたいし本を読むのも楽しいです。から大丈夫です。カープの試合も楽しく見えます。敏子さん達も暑い日がこれからです。無理なさらずがんばって下さい。人生百歳の令和の時代を元気に生きぬきたいですものね。幸福を祈っています。

（83 幸子）

（ペン習字の教本を買って来て字をなぞり大きく書く練習をする）

のがいいと思います。この私の俳誌の文章を新^{あらた}の頭でよくお読みになることもいいと思います。)

暑さ見舞ありがとう。変わりないとのこと安心しております。私は加代子の孫太陽の高校野球の応援で楽しめました。広島代表広島と4回戦延長10回さようなら負けにくくやしくて大いに盛り上がり暑い夏も力が落ちたようです。今は大学に向けて加代子も悩んでいます。今の日本何が良いのか？今の子供達は・・・と不安、自分の年老いた私も不安でも一日一日元氣でがんばりつつあつと言う間に一日が終ります。

(84峯子)

(甥の雅弘君に言わせれば、野球ばあしよる連中に勝てるもんきやー、広島とよーやったよー、となるのかな。がんばらなくても淡々と暮らしていけばいいのです。それで毎日が楽しく思えてくるように。孫のことは親もいることだし、本人の好きなようにと見守ることではないでしょうか。)

暑中お見舞い申し上げます。梅雨明けと共に連日猛暑が続いています。お変わりありませんか。私はまあぼちぼちやつております。どんなに頑張っても人はやがて老いて枯れるのである。それが生きとし生けるものの自然であると思つて暮らしています。娘の処姑が亡くなりちよつと忙しくしております。(子だくさん一羽こぼれて巣立ちせず)(向島フェリーで見あげる千光寺) (8.5健三)

子燕の一羽こぼれてしまひけり

夏の海フェリーより見る千光寺

(みち添削)

拝啓 立秋とは名ばかりの猛暑が続いております。お元氣でお過ごしですか。白金霞7月発行百号、百号有難うございます。俳句を読ませていただき、また人生觀にも触れさせてもらい感謝しています。私の起床時のめまいでお姉さんの経験を教えてもらい参考になりました。その後七月の中旬からめまいの症状がなくなりました。ご安心ください。ご心配をおかけしました。母の一周忌の法会のことですが、連絡もありませんでした。盆が近くお墓参りに行こうと思います。俳句の会で人との交友關係ができ素晴らしいと思います。私はグランドゴルフが一つ増え体力維持にまた人との交わりに努めています。暑い日が続きそうです。ご自愛ください。 (8.8昇)

(別便にて、みちさんが手紙を書くそうです。よくお読み下さい。)

残暑お見舞い申し上げます。敏子さんお便りありがとう。いろいろ心配かけていますので私の分っている範囲でお知らせします。私のこと石川医院かかりつけ医で点滴一週間続けました。今は何も問題ありません。妹たちのことと先日4日に峯子がはがきも来ないのでちよつと来てみたいいろいろ買つて来て二人で昼食たべて帰った。妹の言つたことそのまま書きます。幸子は先日暑中見舞くれた

が今年春頃から体調あまりよくない。手が震えて字も書けない。軽いうつ病といわれた。澄子さんは骨折したりで家のことができないので峯子のところに電話するので和正君が家回りの草取りなど時々行っているとのこと私には言わない。長男も次男もいることだしあまり深入りしたくない、峯子は元気そうだった。高校野球の選手で神辺旭高と広島商業との準決勝で孫の太陽がヒット打って勝っていたのに9回に逆転され、くやしかったと暑さも忘れて加代子と応援に行ったと話していました。熊本的美智子さんが長い手紙をくれて自分の目の病氣（左滲出型加齢黄斑変性症）目に溜まるのを注射で治療するのだそうです。良くなって字も書けるようになりました。主人五郎さんとの思い出話いっぱい書いていました。どことも話すところないのか？私にはよく知らせて来ます。それに対して返信も必ずしていましたので。まあ気にせずありがたく受け止めなくてはと感じています。昨年暮れから身内や組内に不幸が相継いであり何か自分の順番かなーと思うこともあります。8/1智恵子の姑が90歳で亡くなった。本家の江草希一さん99歳で逝かれた。告別式に参列しました。最近は家族で静かにみおくるのが自然のようになっていきます。人ごとではないなーと感じています。（後略）友人の告別式に我想う（8.9 健三）

（光成の未亡人の心の相手もしていただき私から申上げるのも気がひけますが、有難うございます。私は先祖の地に来て横様に好きなことをやって過しております。美智子さんは肥後もつこの未亡人の方でしたが、加齢にて円くなったのですね。）

暑い日が続きますが、お元気ですか。お身体大丈夫ですか。私は少しづつ良くなりつつあります。がんばって家事やっています。盆には福田の墓参り行きました。宏君と栄次二人でなんとか生活して居るようです。その時この本を東京のおじさんに送ってくれと頼まりました。小野乃史さんが「あんたの方の頭の良いおじさんに読んでほしい」と持って来られたそうです。自分たちはよくわからんそうです。木野山さんの盆踊は私が小学三年生位の時福兄も大人も子供も私達二人も踊ったのをおぼえています。地藏さんも子供の頃家々を歩いて米を集めたのも思い出しました。（821 幸子）

（懐かしい同級生の写真も見ましたので礼状を小野乃史さんに送りました。又今月の末に喜寿の会を行うそうなので本誌をミサ子さんに送っておきます。）

拝啓 処暑の候お元気でお過ごしですか。先日「入門俳句二十週」の本を送っていただき、有難うございました。俳句の奥深さを知ることができたように思います。また自分のために俳句を作ること、白金葎の俳句の語句が難

しいと感じていましたが、そのことも分ったように思います。本を読んでいてお札の手紙が遅くなりました。俳句の入門から学習できる良い本だと思います。これからこの本で俳句を勉強し日常の出来事を俳句にして記録したいと思います。今年の秋は天候不順のようで連日雨天で晴間が待ち遠しです。我が家は外壁補修の塗装が終わり足場の撤去をするだけです。野菜は根腐りが心配です。気候変わる時節です。ご自愛ください。 敬具

追伸…お札の気持ちにギフト券を同封しています。本購入の足しにしてください。

年老いて蟬の鳴く声空耳か
鈴虫や我が先にと鳴り競う

(「**リ**や**我が我がと競ひ鳴く**)

みち添削)

(8.29 昇)

(乾坤の変は風雅の種なりと言いますから、出来事だけでなく自然をよく見て描写俳句を作っていくことが先ずいいと思います。)

先日はコンクール見にきてくれてありがとう。次の関東大会もがんばるね。12歳になったから、もつとたくさんすることにしよう戦して成長していきます。ジイジとバアバも体に気をつけて元気できてね♡菜那

まだまだ暑い日が続いていますすがいかがお過ごしですか？今日は関東に台風15号が直撃して電車も運休、駅などは混乱しています。先日は娘の菜那の合唱コンクール

に来て頂きありがとうございました。昨日九／七に関東甲信越大会があり惜しくも高階小は銅賞となりました。菜那は悔し涙が止らず壇上でも泣いていました。本気で金賞を取りたかったとのことです。←テレビで放映されます。9.21 2チャン 14:00 ~ 17:00。昨日九／八は里樹の学祭に行き、応援団を見て改めて伝統、団結、活気ある学校と感じました。里樹は生徒会として裏方として連日頑張りました。写真の雷門の中にある福猫は里樹が書いたらしいです。この週末は子供達に充実した想いをもらった良い週末でした。親である私達も引き続き頑張つて行きます。忙しい日々が続きますがまた連絡致します。(9.8 拓也)

日中の暑さはまだ厳しいですがその後お変わりもなくお過ごしのこととお喜び申し上げます。先日は俳誌「白金葎」と股関節の記事をお送り頂きまして有難うございました。こちらは何年間か置きに入退院しながらも何とか生き延びていますが、八月半ばから又杏林大病院のお世話になりましたお返事がすっかり遅くなり申し訳ございません。光成さんが俳句会を主宰なさっていることをお聞きしたのは還暦同期会の頃でしょうか。それからでも二十年近くともかく一〇〇号とは感服いたしました。素晴らしいです。退職後始めた句作りを一昨年から私の看護に追われてできなくなってしまった主人に照らして

も長い間定期的に句会を催すことだけでもどれ程大変なことかよく分りました。本当におめでとうございます。

どうぞお身体に気をつけてこれからも長く続けられます様願っています。表紙題字の綾女さん、裏表紙絵の三原さんとても懐かしく又才能豊かな戸手高の友人方を誇らしく思います。股関節の名倉先生は存知ませんでした。現在先天性股関節脱臼が少ないのは先生方の長年のご研究の賜でしょうネ。手術の技術が上がり入院日数も私が手術を受けた三十年前に比べると十分の一近くに減っていますが、残る一本を手術したいと願いながらも他の病が邪魔をせずと延びくです。その様なことで「山田先生の会」には出席できそうにありませんので宜しくお願い致します。お心遣い心から感謝しております。手に力が入らず乱筆乱文でお許しください。時節柄どうぞご自愛ください。

光成高志様

かしこ

小川千代子(830)

台風直撃の報に大変でしたのとはとお見舞い申し上げます。暑い夏も過ぎましたが、不順な気候に加えて大型台風の襲来に気持ちちが打ちのめされそうですが、呉々もお気をつけ下さい。

(913 綾女)

(私は不思議でたまらない 黒い雲からふる雨が銀にひかっていることが 私は不思議でたまらない 青い桑の葉たべてある蠶が

白くすることが 私は不思議でたまらない たれもいぢらぬ夕顔がひとりではらりと開くのが 私は不思議でたまらない 誰にきいても笑っててあたりまえだといふことが 金子みすゞ詩 よしだみどり繪 以上は裏の絵ハガキ、繪は省略

とても長くごぶさたしているような気がいたしますが、時に夜は秋冷を感じ日中は残暑どころか猛暑気分の日もありで、何者かに翻弄されているみたいです。お体調いかがでいらつしやいますか、気にかゝりながら、失礼しておりました。さすがの私も何となく夏バテってこんなものかと思う日もありながら人様のお手も借らずどうやら生きております。この夏とかげやもりかまきりくもと虫ぎらいの私の許せるこの四種も見ることが出来まだ我が庭に生きていることに安らぎを感じました。ハチは多分これからキイロスズメバチも訪問してきます。海へも山へも田も畠も行かず見ずで秋になりますが、テレビでいやと云うほど見たりして何か何でも行きたくもなしはやはり老いの自然と思います。敬老会のおきそいも行きませんでした。早朝毎朝公道を暑い時も寒い時も掃いているオセツカイバアサンに、おはようと云い一寸立ち話をする人は何と稀か、近所の成人男女中小学生の子供、アイサツをしない世の中で何が敬老の日か止めると云いたいです。こちらが大きい声でお早うございますと

云つても無言で頭を下げるだけ、物を食べる口はあつても話す口は無いのかと内心思います。(中略) 四季折々に合わせて生命をつなぐ白金葎のさわやかさの如く生きたいのは夢と思います。世界のどこかでいつもケンカあり、お国の偉い方々の間ではウンがまかり通り北朝鮮へ連れられていった人達は四十数年も取り返せず家族は古い千葉県の台風15号の被害をよそにテレビは「むだ喰い」場面ばかり不平不満はまだぐあり、老いのたわ言を書き連ねました。俳句世界にどっぷりとも行かずいつ迄も家事がつきまといまます。お読み捨て下さい。御誌掲載拒否です。お体お大切にすてきな秋をお迎え下さいまますよう。ごきげんよう。

長屋璃子

光成高志様 光 みち様

(9.17)

秋暑も少し和らいだようですね。夜はアオマツムシがひと頃ほどではないけれど、よく啼いています。先日、南柏駅付近のささやかな林で、こんなところ何も居ないだろうと思ひながら探してみたところ、十数匹のクワガタと蝶の幼虫を発見、いまクワガタは6匹居て、夜毎こそその音を立てて眠りを妨げております。幼虫はアカホシゴマダラという蝶になりました。

(9.22 陽二)

台風被害の長期化で千葉県が思っていたより過疎で広大な山林地域だったことを知りました。東電も原発事故

の尻ぬぐいで送電インフラの維持に廻す金が乏しくなつてしまつたようです。無罪判決の元経営陣はほつとしただろうが避難者は未だ何万人もいる。法規定を破つていないから無罪という判事は、その法を守つたゆえに事故を防げなかつたこと、そして原電が法を無視して防護工事したがゆえに東海村は無事だつたという事実をどうみて無罪判決を下したのだろう？東電とその擁護派は、事故以前に原発の事故予防不足を警告し対策を求めた福島県知事を検察特捜部に介入させて収賄容疑で告発し、金銭授受事実無しにかかわらず有罪判決、政界から失脚させた。その後数年で3.11が到来、世紀の悲劇が発生した。最近、「失敗の本質」という敗戦の組織的原因追求の本を読み、セクシヨナリズムの愚かさを痛感。事実を正視する勇氣と思想の大切さを思つたことでした。(9.23 健二)

我孫子日記

	7/29
*	葛西臨海公園
	8/8
*2	大宮シティホール
	8/10
*3	ACC(源氏物語)
	8/13
*4	北総病院(泌尿)
	8/18
*5	トライアスロン
	8/20
*6	北総病院(内科)
	8/30
*7	増富温泉
	9/5
	源氏物語
	9/7
*8	恵比寿・ACC
	9/11
	SOA
	9/13
*9	上野
	9/18
	SOA
	9/20
	例会

*八畝の花匂ふ潮風届く駅(みち)

向日葵におもてなしとて万国旗

梅雨明けやゆつくり上がる観覧車(みち)

涼風や童謡流すパークトレイン

吊橋の袂夏草吹かれをり（みち）

夏木立間に見え来る吾がホテル

アネモネてふ珊瑚びつしり岩に咲く

藤壺の蔓脚出でて花咲かす

藤壺の殻覗きゐて涼し（みち）

太刀魚の水中まこと立ち泳ぎ（みち）

水族館光速並みの鮪たち（みち）

岩に立ち空見あげをり夏のペンギン

♫立秋やハイソックスのコーラス隊

弓歩 ゴンブー に立ってコーラス秋立てり

♫秋立つや何か急かるゝ新宿の街

♫何処からか蝗一匹駅ホーム

何となくてうれしきの盆の入

♫トライアスロンパラのスイムも速い哉

トライアスロンスイムの列は舟の航路

トライアスロンスイムリレーの選手かな

♫竹林の木下闇ありバス抜ける

♫稲穂る谷間の棚田美しき

どの木にも葛の被さる山の道（みち）

岩風呂へ向かふ崖道秋の蟬（みち）

夏山の重り合うて湯治宿

秋の青空白雲と八ヶ岳

♫保己一の俯く像に枯紫陽花

♫新涼やへちま祈禱の木魚の音

十五夜と松の蒔絵の硯箱（みち）

立像はやゝ前傾す秋彼岸

編集後記

璃子さんのお便りに掲載拒否と書いてありましたが、内容は全く同感でありますので、編集子の特権にて載せました。同様のニュアンスが最後の健二さんのメールです。これも同感。千葉県の台風被害につきお見舞状やら電話やら頂きました。我孫子市は思ったほどの強風はなく停電もなく僥倖でした。次の台風の余韻の風が今吹いております。八月を休みにした分お便りが多くなり二十頁になりました。私は今源氏物語と芭蕉の文を読んでいます。どちらも十代からですが、ブランクがありました。が、思い続けて何十年もなります。若い時は分からなかったけれども今は時々ちらちらと作者の思いが見えることがあります。その瞬間があります。これを楽しみに読んでおります。

白金霞九月号（通巻第二〇二号）令和元年九月二十四日発行

編集・発行人 光成高志 二七〇・二二九我孫子市南新本二四一七

表紙の題字…加納綾女 写真九月二十一日の白金霞